

外国語教育と音声指導
—— 英語専修プログラムにおける課題と展望 ——

The Effect of Proffering English Pronunciation Lessons
on Primary/ Secondary Education Majors

西山 裕子

NISHIYAMA Hiroko

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第16号 2021年

【研究ノート】

外国語教育と音声指導

——英語専修プログラムにおける課題と展望——

The Effect of Proffering English Pronunciation Lessons
on Primary/ Secondary Education Majors

西山裕子*

NISHIYAMA Hiroko*

要旨

学習指導要領の改訂に伴い、英語教育においては言語活動を中心とした授業を行うための様々な改善が求められるようになった。そのため、児童や生徒のコミュニケーション能力を高めるためには従来とは異なったアプローチをとる必要がある。中等教育における英語学習を例にとると、小中接続にむけた指導を円滑に行うことが今後の課題の一つであるが、「聞く」「話す」「読む」「書く」という英語4技能のうち、「聞く」「話す」ことを向上させるためには、大学で開講されている科目それ自体にも工夫が必要となっていく。本稿では、児童や生徒のコミュニケーション能力を高めるという目標を達成するために、英語文化学科で行われてきた音声指導と演習とを教育学科の英語専修プログラムに採り入れることが有益であることを提唱し、中学校教諭第一種免許状取得希望者に対する音声指導の意義とその課題を検証する。

1. はじめに —— 研究の背景

令和2年3月に刊行された『中等教育資料』の冊子で、外国語教育について特集が組まれている。この背景には、新学習指導要領における「外国語」が令和3年4月から中学校において全面実施されることがある。特に指摘されている点は、「令和二年度からの新小学校学習指導要領の全面実施を踏まえ、小学校との連携をこれまで以上に密にすること」の必要性であり、「聞く」「話す」「読む」「書く」という英語4技能のコミュニケーション能力を高めるためには音声や動画を含む教材を活用するなど、言語活動を中心とした授業を行うために授業改善が求められているとされている¹。

これまで本学においては、文学部教育学科に所属する学生が中学校教諭第二種免許状（英語）を取得するためには、教員免許法に基づき文学部英語文化学科において教職課程で定められた所定の単位を修得するなど免許取得要件を満たすことが必要であった。そのうち、教育学科の設置によって2019年度入学生から教育学科で中学校教諭第一種免許状の取得ができるようになった。

英語文化学科と教育学科の教科及び教科の指導法に関する科目をみると、英語文化学科では、4つの専門的事項に関する科目が挙げられている。開講科目の内訳は、英語学、英語文学、英語コミュニケーションと異文化理解である²。教育学科でも同様の開講科目があるが、開設されている授業科目を比較するとその数と内容について興味深い相違点があることがわかった。

筆者が所属する教育学科の科目を例にとると、英語学において開講されているのは英語学のみである。それに対して英語文化学科では、英語学における開講科目の数は9科目であり、その内容は発音、文法、構造、英語の文化的背景など多岐にわたる。英語文学では、教育学科が3科目、英語文化学科が4科目の科目数があるが、英語文化学科の科目「文学作品演習IA」と「文学作品演習IB」は半期の演習科目であるため、総単位数は教育学科と変わらない。英語コミュニケーションでは、双方ともに10科目ある。異文化理解では、教育学科が4科目、対する英語文化学科では3科目開講されていることから、単位数では教育学科が3単位上回っている。こうしてみると主な違いは、英語学の開講科目数と単位数ということになる。

従来の学習指導要領では英語4技能とコミュニケーション能力の修得が目標として掲げられていたが、発音・文字・語と連語および慣用表現、そして文法と句型という言語形式を基準としているために、コミュニケーションを目的とする英語がおろそかになったと指摘されている。新学習指導要領でも、聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの5つの領域別に設定された目標を鑑みれば、中学校学習指導要領（外国語）で挙げられている「英語の特徴やきまりに関する事項」にある音声指導は、「各言語の目標及び内容等（英語）」で指摘されているように、実際のコミュニケーションにおける技能として欠かすことが出来ない指導内

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

容であると捉えることが出来る³。

本稿ではこのような背景と大学の現状を踏まえながら、音声指導が教育学科の学生にとって、教育現場におけるコミュニケーション能力を高めるための有効な一つの方法であることを示し、教育学部における英語専修プログラムのうち中学校教諭第一種免許状取得に関わる科目についてこれからの課題と展望を考えていきたい。

2. 音声指導について

では、コミュニケーション能力を高めるために、なぜ音声指導を重視する必要があるのだろうか。竹岡(2009)は、コミュニケーション英語、つまりは「英会話」力を高めるためには「通じる発音を身につけることが大切である」と説き、「英語を話すのが楽しくなるには、ある程度通じる発音を身につけておく」⁴ことが重要であると考える。樋口(2017)は「学習の初期の段階から母語の助けを借りずに目標言語を使用する」⁵ことは「外国語活動の充実」に直線的に結びついていると指摘する。太田(2012)は「特に音声認識に敏感な初年次教育の段階においては英語の音声と音韻規則の体得を促すべく音声指導が不可欠である」⁶ことを強調する。

このように、近年、日本の英語教育において実践的な教育方法の導入の必要性が問われている。行森はじめ多くの研究者が指摘するように、世界共通語としての英語、つまり、「World Englishes」とよばれている国際英語の研究分野において、のちの英語教育の現場や教授法にも影響を与えることになった概念を提唱した代表的な研究者が、インド出身のカチュル(Braj B. Kachru)である⁷。彼は言語の国際的モデルとして、三つの同心円(Three Concentric Circle)を導入したことで世界的に高く評価されている社会言語学者であるが、「英語という言語が基本的にEFL(English as a Foreign Language)として話されている」国を示す拡大円圏(Expanding Circle)にまで及ぶ現在では「English」という概念そのものが社会言語学の観点からみた「現実」を反映していないのではないかと主張する⁸。ジェンキンス(Jennifer Jenkins)は、世界言語となった英語を多くの非母語話者が「外国の」言葉としてというよりはむしろ接触言語(contact language)として、第一言語を違えた人々が互いにコミュニケーションをとるための言葉であると捉え直してELF(English as a Lingua Franca)を提唱して、英語の変種であるヴァリエティとアクセントの関連性など、発音が英語学修にとって重要な要素となると指摘して、言語のイデオロギー体系を多角的に分析する⁹。

今日、英語は様々な国で多義的に世界言語(World Englishes)として話されている。このような文化的・歴史的背景を含んだ言語のヴァリエティ、つまり言語の多様性を認めるとき、行森(2017)も論じるように本来

標準英語とされる英語そのものにも、社会学的に観ると幅があるということからも¹⁰、これからの英語指導では音による異文化理解という観点から積極的に社会的背景を踏まえて英語の音のしくみを理解し、英語の音を採り入れることが望ましい。英語科教員養成という立場で考えれば、学習指導要領で掲げられている「標準的な」発音の修得のために母音や子音の音素指導が欠かせないのは、日本の英語科教育の現状を踏まえた音声指導の実践を奨励する大坪(1999)¹¹や上田と大塚(2013)¹²らの考察からも明らかである。教員が「標準的な」発音を指導するためには、“World Englishes”の概念を軸に自ら英語のバラエティを容認する姿勢も求められることであろう。

3. 研究の目的と方法

教育学部教育学科の新カリキュラムでは先に述べた英語学の分野において「英語の発音」(英語音声学)に関する科目が単一のものとして開講されていない。本調査の目的は、特に中学校第一種免許状の取得を希望する学生が将来的に新学習指導要領に即した授業を展開することができるように、教育学科における音声指導の必要性と可能性を明らかにすることである。

筆者は2017年度から2019年度までの3年間、「英語の発音A」と「英語の発音B」という英語文化学科の1年生を対象とした音声指導の授業を担当した。この経験を踏まえて、調査目的を達成するための方法として、2019年度の後期の授業で教育学科1年生を対象として、発音学修とその効果に関する学生の意識調査を試みた。

具体的には、筆者が担当した新教1年「英語II」における授業において、授業の一部の時間を使って英語の発音に関する基礎的な知識を解説したのち、本学のCALL教室で導入されているキャラボやムービー・テレコ、音声指導のために使われている海外の音声ソフトなどの機材を有効活用して、英語文化学科で実施した方法と同様の実践演習方法を用いた。具体的には、ウェルズ(J.C.Wells)も述べるように、ミニマルペア(minimal pairs)¹³となる語句の音素の違いに着目した調音の練習を行った。音声上では同一であっても明らかに単語の意味が異なる語句を確認して音素を区別するパターン演習方法である。

英語の音声指導では音声学者ダニエル・ジョーンズ(Daniel Jones)によって提唱された国際音声記号(International Phonetic Alphabet)を基にした発音記号を用いることが広く普及しているため、英語学習者の音声指導に関する調査はこの発音記号をもとに進めた。

ただし、「英語II」の科目は初年次コース共通科目として小学校教育コース、小学校・中学校教育コース、幼児教育・保育コース、国際教育コース、すべてのコース

声・調音器官・音の分類について

- 第3回 教科書つづき, [音声指導②] 母音と子音の特徴
- 第4回 教科書 Unit 8 Help, I'm lost, [音声指導③] /ɑ:/, /ɑ/, /ʌ/, /ə/ 母音 (1)
- 第5回 教科書つづき, [音声指導④] /i:/, /i/, その他 /u/, /u:/ 母音 (2)
- 第6回 教科書 Unit 9 Travel, [音声指導⑤] /ei/, /ɜ:/, /æ/ 母音 (3)
- 第7回 教科書つづき, [音声指導⑥] /ou/, /ɔ:/ 母音 (4)
- 第8回 教科書 Unit 10 Dating, [音声指導⑦] /ər(:)/, /æər/, /ɔər/ r音化, 母音 (5)
- 第9回 教科書つづき, [音声指導⑧] /p/, /b/ 子音 (1) 破裂音
- 第10回 教科書 Unit 11 Eating Out, [音声指導⑨] /r/, /l/ 子音 (2) 半母音, 側音
- 第11回 教科書つづき, [音声指導⑩] /θ/, /ð/, /f/, /v/ 子音 (3) 摩擦音 (1)
- 第12回 教科書 Unit 12 Health, [音声指導⑪] /ʃ/, /ʒ/, その他/s/, /z/ 子音 (4) 摩擦音 (2)
- 第13回 教科書つづき, *アンケート実施
[音声指導⑫] /f/, /dʒ/, その他/m/, /n/, /ŋ/ 子音 (5) 破裂音, 鼻音
- 第14回 まとめ, [音声指導⑬] 音の連結, リズム, イントネーションなど
- 第15回 統括
(教科書を使用した指導では「英語 I, II」のシラバスに記載されているテキストの Unit7~12 の範囲を扱った)

4. 調査結果と考察

以下に質問 1~5 に対する調査結果を示した。その上で考察を加える。

(1) 質問 1 「これまでに英語の発音を習ったことがあるか」に対する調査結果

質問 1 に対する回答は図 1 で示す。また、「はい」と回答したもののうち、いつ、どこで学習したのかを示す内容は、人数とともに図 2 で示す。

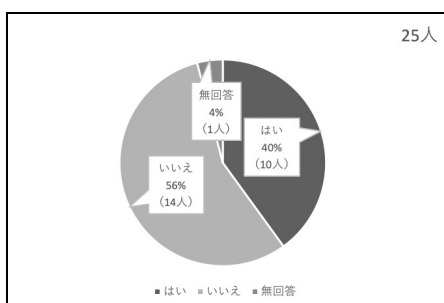


図 1 英語の発音についての学習経験 (n=25)

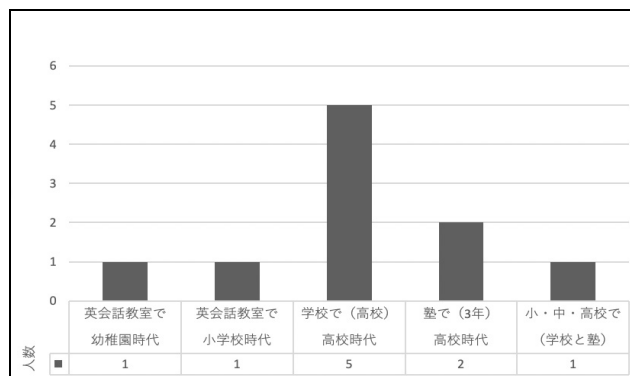


図 2 「はい」と回答した場合、どこで (いつ) 発音を習ったのか (n=25)

(2) 質問 2 「母音・子音それぞれについて発音するときに難しいと感じる音はどのような音か」に対する調査結果

質問 2 に対する回答を母音と子音に分けて以下のように図 3, 図 4 で示す。有効回答数 (人数) は 25 であるが、複数回答を許可したため、回答数の総計は 25 を超えている。

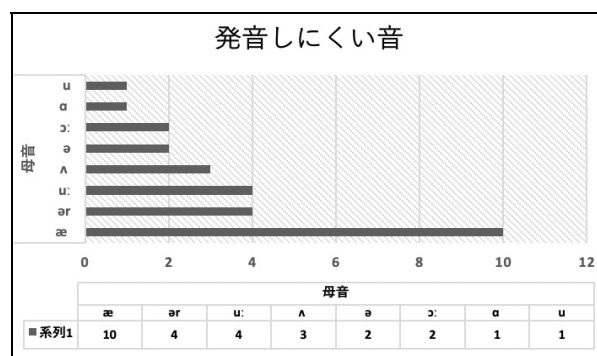


図 3 発音するときに難しいと感じる音 (母音)

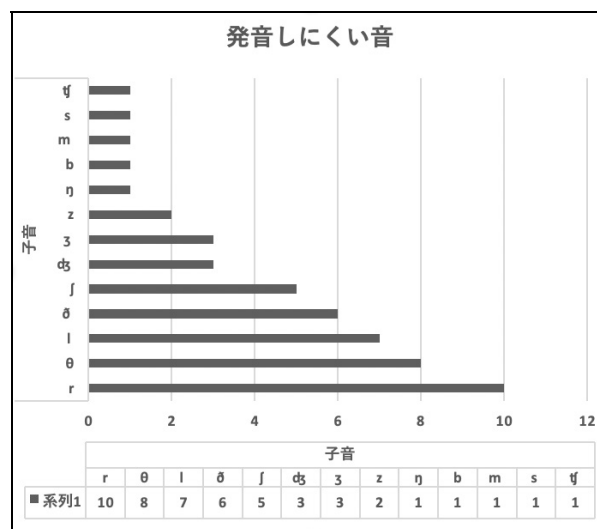


図 4 発音するときに難しいと感じる音 (子音)

(3) 質問3 「母音・子音それぞれについて聞き取りのときに聞こえにくい音はどのような音か」に対する調査結果

質問3に対する回答を母音と子音に分けて以下のように図5, 図6で示す。質問2と同様に有効回答数(人数)は25であるが, 複数回答を許可したため, 回答数の総計は25を超えている。

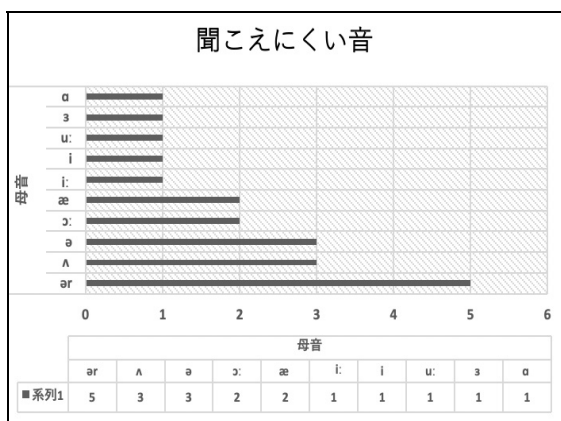


図5 聞き取りのときに聞こえにくい音(母音)

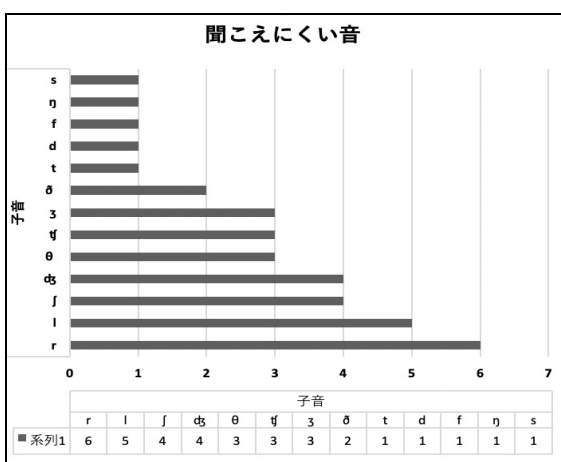


図6 聞き取りのときに聞こえにくい音(子音)

(4) 質問4 「発音練習は役立つと思うか」に対する調査結果とその理由(自由記述)

図7に, 学生の回答を示す。回答理由の欄では複数回答を可としたため, 回答数の総計は25を超えている。

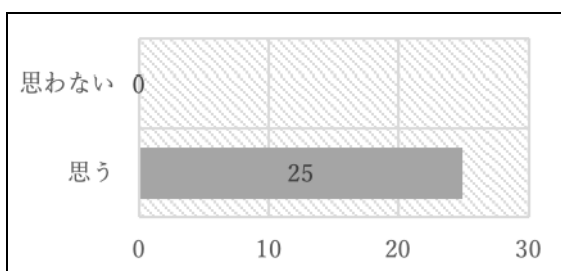


図7 発音練習は役立つと思うか (n=25)

図7で「思う」とした学生の回答は以下のとおりである。(無記名式, 自由記述, 順不同)

- ① 小学校の英語教育 [に役立つ]
- ② 外人さんと話すとき会話がはずみそう
- ③ 英語を本格的に話しながら勉強できて楽しいからモチベにつながる
- ④ 相手に伝わりやすくなるから
- ⑤ 子どもは耳が良いから, 下手な発音より上手な方が良いと思った
- ⑥ 教える立場になったときに必要
- ⑦ 日常的な会話をするときに役立つ
- ⑧ 知識だけの英語じゃなくて通じる英語にならないかと思います
- ⑨ 英語をしゃべらないといけないときやネイティブの人としゃべらないといけないときに発音が大事になると思うから
- ⑩ スピーキングする際に必要だと感じる
- ⑪ 海外に行ったりして実際英語を使うときに必要になると思う
- ⑫ リスニングのときに役立つと思った
- ⑬ 外国の人と接する機会が増えると思うから
- ⑭ かつこよく話せる
- ⑮ 外国の人と話すとき正しい発音が良いから
- ⑯ 発音だけでも上手ければ一応相手に伝わるから
- ⑰ 正しい発音を学べると自信がついてもっと話そうと思えるようになる
- ⑱ 外国人と話すときに間違った聞き取りを少なくできると思う
- ⑲ 外国人により伝わるし, 笑われなくなる
- ⑳ 外国に行きたいから
- ㉑ ネイティブの方と話す時に伝わる
- ㉒ 子どもに教えるときに役に立つと思う
- ㉓ 英語を話す時や聞き取る時
- ㉔ 日常的にでてくる英単語でも, 意識的にネイティブに話せるようになるから
- ㉕ 英語が伝わりやすいから
- ㉖ 実際に教えるときに適当な発音では生徒に申し訳ないから
- ㉗ 英語に自信がもてる
- ㉘ 子どもに正しい発音を教えてあげられる

(5) 質問5 「「聞く」「話す」「読む」「書く」という英語4技能のうち最も苦手とするスキルは何か」に対する調査結果(選択式, 複数回答不可)

質問5に対する学生の回答を図8で示す。

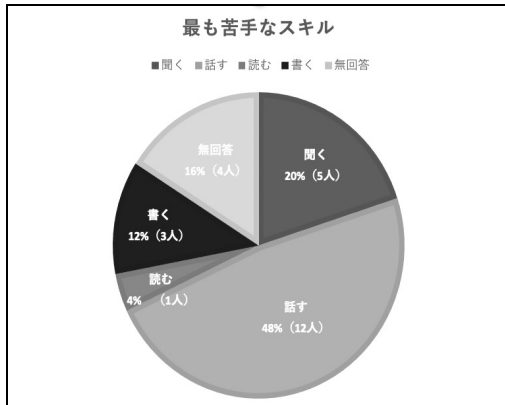


図 8 最も苦手なスキル (n=25)

では、質問 1～5 までの結果を踏まえて、以下のように分析し、考察する。

図 1 が示すように、受講生 25 名のうち、無記名 1 名を含めた有効回答数は 25 (人) であった。内訳では、「はい (習ったことがある)」と答えたのは 10 人、「いいえ (習ったことがない)」と答えたのは 14 人であった。そのうち、「はい」と答えた学生がいつ、どこで学習したのかを調べると、図 2 が示すように、高校のときに学校で学習したと答えた数が最も多く (5 人)、次いで、高校 3 年生の時に塾で学習したと答えたのが 2 人であった。高校 3 年生で学習したのは、近年、大学受験で英語の発音問題が出題されていることが影響していると考えられる。

図 3 について、学生にとって発音が難しいと感じられる音として、10 人が /æ/ と回答していることがわかった。そこで、発音学習の経験があるものとないものとの間で、母音の発音の得手不得手に差があるのかを回答用紙でさらに調べてみた。すると、「はい (習ったことがある)」と回答した 10 人のうち 6 人が /æ/ の音の発音が難しいと答えていたのである。また、母音のうち /æ/ の次に発音が難しいと感じられる音は、25 人中 4 人が /ɑ:(r)/ であると回答しているが、この 4 人はすべて発音学習の経験者であった。「ア」の音に関しては、次いで難しい音は、3 名が回答した /ʌ/ ということになるが、この /ʌ/ についても、実に 3 人のうち、2 人が発音学習の経験者であった。確かにこのデータによれば、/u:/ についても同等の数である 4 人の回答があるが、アンケートの詳細をみて比較するとこの 4 人はすべて発音経験がないものたちである。その他の長母音や短母音についての発音の難しさは個人差が一因であると考えられるが、母音における回答をみると、発音経験者が母音の発音の難しさを指摘していることが調査結果によりわかった。この理由はなぜなのだろうか。

先述した図①「英語と日本語の基本母音図」をみると、英語の発音では口蓋のなかの舌の高さや位置で、調音が変化していることがわかる。図のなかでカタカナ表記の

㊦㊦㊦㊦は日本語における調音点を示すが、特に日本語の「ア」の音は英語ではさまざまな調音点が確認できるため、フォニックスを用いるだけで音を判断しようとすると音の領域を正確に区別することが厄介だ。松香 (2000) によれば、「ア」の音を英語で発音するとき、児童にこのように説明するとしている。

a という文字の短母音の音は、あまりきれいな音ではありません。

まず、口を横に思いっきり開いて下さい。それからあごを下げながら「ア」と言ってみてください。(以下、中略)

この a の音は日本語の「あ」の音とはまったく異なった音です。あごを下げながら何回も言ってください¹⁵。

引用にある「あごを下げながら」とは、英語音声学の表にある、低母音を出すための動きであると思われるが、厳密に言えば、前舌・中舌・後舌の区別を伴わないため、初等教育から中等教育への接続を考えると「ア」は曖昧な音になってしまう可能性がある。もっとも、フォニックス学習法はどうかして子どもに英語の読み・書きを教えたいという願いから生まれた音声導入の民間療法の役割をしていると考えられているため、厳密に言えば言語学 (英語学) の一分野としての英語音声学と比較すれば言語に対するアプローチそのものが異なっているし、フォニックスと音声学との大きな違いはフォニックスではまったく発音記号は使わないという点にある。しかしながら、松香も指摘するように、音声は言語修得に不可欠な部分であり音声言語に欠かせない役割をしているというのであれば、明瞭に発音する術を学び、発音に自信を持つことで、英語そのものへの自信や理解もより深まると考えられる¹⁶。

中学校の新学習指導要領で定められている「3 内容の取り扱い 2 (2) イ」にある「必要に応じて発音表記を用いて指導する」(下線部は筆者)方針を考慮すれば、教育学部のカリキュラムでは、小中接続を意識したうえで、学生が将来的に教育現場で指導する立場となることを視野に入れなくてはならない。そうすると、発音記号を用いた基本的な音声指導を導入することが好ましいということになる。

同様に、母音に着目して質問 3 に対する回答を分析すると、図 5 にあるように、5 人が「聞こえにくい」音は /ɑ:(r)/ (r 音化) であると答えている。次いで 3 人が /ʌ/ や /ə/ であると答えていることから、この結果からも学生にとって「ア」の音域の区別がつきにくいことがわかる。

子音に関して言うと、図 4 と図 6 の結果からわかるよ

うに、従来日本人が発音上また、聞き取り上で不得手であるとされている、/l/, /r/の音や/θ/, /ð/, さらには、/ɟ/, /dʒ/の音が回答の上位を占めている。これらの音素に関しても、フォニックスと英語音声学どちらの方法で学習したのかにより、のちになって音への理解に影響を及ぼすものと思われる。具体例を挙げると、フォニックスでは、/l/を発音するとき、「ル」と言うときの唇の形を作っておき、舌の先を上歯の裏側につけて、短く発音するのだと説明付けされている¹⁷。

日本語の「ス」の発音は英語では二種類あり/θ/, /ð/となるのだが、フォニックスでは、前述したように発音記号を用いた音声学的なアプローチをとらないため、口の動きや舌の動きの変化というような音の作り方に対する説明が主である。歯と歯との間に舌を挟んで「ス」と言えば/θ/となり、歯と歯との間に舌を挟んで「ズ」といえば、/ð/となる¹⁸。

音声学の教科書によれば、日本語にはみられない/l/, /r/をはじめとする音に対して、日本語の「サ行」「ザ行」の子音で代用する傾向があることに注意を促している¹⁹。教育学部のカリキュラムでは、「発音」は教員養成課程のなかの学修領域の一つであるとの性質上、英語学における英語音声学で取り扱われている一連の学問としての知識は必要ないかもしれないが、せめて、有声音と無声音とは何かという事項には留意する必要があるだろう。調音するときの口の構造や場所を意識した上で発音をおこない、口腔内でどのように呼気の流れが妨げられているのか（調音法）という口の中の空気の流れにも着目して、明確に音を区別し、日本語にはない音を再生するためにいくぶんなりとも発音記号の基礎的な知識を持つことが大切なのではないだろうか。教員養成課程において、国際音声記号（IPA）は音声指導において絶対的な条件とまではいかないまでも、基礎知識として言語構造を理解するための重要な学修内容となり得る。構造を理解して、さらに様々な国の英語の音の独自性を認めることができれば、世界言語としての英語への理解も深まるであろう。

教育学部における音声指導の有用性については図7の回答にみられるとおりである。この結果は、裏を返せば、音声指導を受けたいという学生の希望を反映している。特に注目すべき回答としては、⑤子どもは耳が良い、⑩実際に教えるときに適当な発音では生徒に申し訳ないから、⑫子どもに正しい発音を教えてあげられる、である。

英語が教科となった今、間接的ではあるが学生のこの3つの指摘は、コミュニケーション英語における課題を示唆する一方で、教員養成課程における外国語教育の今後の在り方も提示していると考えられる。図8が示すように、学生が最も苦手であると答えている「話す」スキルに対する苦手意識を克服するためには、発音

練習と発音学習は重要な位置を占めていくのではないかと。

英語教員を志望する学生を対象とした他の調査結果でも、問4の回答と同様に、「正しい」発音を身につけたいと考える学生は多い。森本が行った、日本人英語学習者の発音学習に対する調査結果²⁰や、教職課程、とりわけ中学校および高校での英語指導にむけて一種免許状を希望する学生を対象とした調査では音声の指導法がわからないとする学生がいるという結果がでており、知識だけではなく、指導する立場になるためには知識、発音能力、発音指導法の3つの側面を学生が学ぶ必要があると明記されている²¹。

5. まとめ——統合的な学修にむけて

実利的な英語力の必要性はこれまでも論じられてきた。戦後、1950年代に争点になっていた英語の必修対、部分的必修という問題については、寺沢（2014）が『《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程』で取り上げているように、1970年代になるともはやごく基本的なレベルではあるが、中学生すべてが英語を学ぶことが共通認識になっていたことがわかる²²。1950年代後半から60年代の「役に立つ英語」²³論の背景に、過去に外国語教育活動において実際に使えなければ「[実際に使えない英語は]不健全である」と考えられていたように²⁴、英語学修におけるこれまでの歴史を振り返れば、幾分端的ではあるが、今なお「スキル以外の価値を軽視するような」²⁵流れが残っていると考えられる。

現在、教育学科では主免許を小学校としていることから、中学校教員第一種免許状の取得にあたって小学校教員養成課程の外国語（英語）コアカリキュラムを意識する必要がある。文部科学省によれば、その学習項目の一つに「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じた意味のあるやり取り」がある。到達目標として「児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる」こと、ならびに、「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる」²⁶ことが掲げられていることから、英語学習者に「どうやって学ばせるのか」²⁷について、新学習指導要領の全面実施にあたり再考すべき転換期が訪れているのではないだろうか。さらに、英語を教える側も学ぶ側の立場にたつて英語そのもののしくみをしっかりと理解する機会を得る必要性も再考されるべきなのではないだろうか。

とはいえ、コミュニケーション能力を高めるために音声指導を通じて、教科として専門的な英語指導が実践できる教員を養成するべきであると言いたいのではない。むしろ、重要な点は、大学で開講されているそれぞれの科目から得られる技能の統合によって、免許法施行規則

に規定された科目・単位数からだけでは得られないことがない相乗効果を引き出すことである。英語文化学科のように独立した一つの科目とまではいかななくても、英語音声学を基にした音声指導を科目のなかに組み込むことができれば、学生にとって得るものが大きく、音声に対する取り組みや教育現場での応用への意識の変化が期待される。

結論として、教育学科で現在開講されている科目のうち教科に関する専門的事項となる4つについて、英語学では英語音声学の基礎を、英語文学では音声学と関連付けて伝承童謡 (Nursery Rhymes) を用いたチャンツとリズムや文化的背景の説明を、英語コミュニケーションでは発音練習を通じたリスニングへの応用を、異文化理解では音や言語の多様性を導入する——といったように、科目の指導内容に一ひねり加えていけば、今以上に統合型学修を充実させていくことが可能となるのではないか。現状においては、英語専修プログラムについて幾分かの課題も散見されるが、今後、教職を志望する学生を対象として音声指導を実践することが出来れば、教育学部における外国語教育は新たな第一歩を踏み出すことになるであろう。

注

- (1) 「外国語教育について」『中等教育資料』文部科学省, 2020, pp. 9-13.
- (2) 『履修便覧』武庫川女子大学, 2020, p. 226, 237.
- (3) 『最新英語科教育法入門』別冊付録, 研究社, 2019, pp. 17-25.
- (4) 竹岡広信『英語の頭が変わる勉強法』中経出版, 2009, p. 129.
- (5) 樋口忠彦『新編小学校英語教育法入門』研究社, 2017, p. 125.
- (6) 太田かおり「日本の英語科教育における音声指導の現状: 初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して」『社会文化研究所紀要』69, 九州国際大学, 2012, p. 69.
- (7) 行森まさみ「国際語としての英語における標準語イデオロギーと規範主義」『異文化コミュニケーション論集』15, 立教大学, 2017, pp. 79-81.
- (8) Kachru, B. B. "Teaching World Englishes" in *The Other Tongue: English Across Cultures*, 2nd ed. Urbana: University of Illinois Press, 1992, pp. 355-357.
- (9) Jenkins, Jennifer. *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press, 2007, pp. 1-30. および, Jenkins, J. "English as a Lingua Franca in the Expanding Circle" in M. Filppula, J. Klemona and Sharma, D., eds. *The Oxford Handbook of World Englishes*. Oxford: Oxford University Press, 2017, pp. 549-555.
- (10) 前掲(7), pp. 86-88.
- (11) 大坪喜子「World Englishes: その概念と日本の英語教育へ意味するもの」『長崎大学教育学部紀要』33, 長崎大学, 1999, pp. 69-77.
- (12) 上田洋子・大塚朝美「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析」『大阪女学院大学紀要』10, 大阪女学院大学, 2014, pp. 1-15.
- (13) Wells, J.C. *Accents of English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1982, p. 47.
- (14) 津田塾大学英文学科『アメリカ英語の発音教本(三訂版)』研究社, 2012, pp. 3-4.
- (15) 松香洋子『アメリカの子供が「英語を覚える」101の法則』講談社, 2000, p. 69.
- (16) 同上, pp. 9-10, 21-22, 25.
- (17) 前掲(8), p. 97.
- (18) 前掲(8), pp. 133-134.
- (19) 前掲(14), p. 14.
- (20) 森本俊「英語教員志望学生における発音学習・指導に関するピループの研究」『論叢』60, 2019, pp. 23-53.
- (21) 河内山真理・有本純・中西のりこ「教職課程における英語発音指導の位置付け」『外国語教育メディア学会 (LET)』50, 2013, pp. 119-139.
- (22) 寺沢拓敬『「なんで英語やるの?」の戦後史』研究社, 2014, p. 82.
- (23) 同上, p. 132.
- (24) 前掲(22), p. 143.
- (25) 前掲(22), p. 253.
- (26) 文部科学省『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業——平成28年度文部科学省委託事業報告書』文部科学省, 2016. 「小学校教員養成課程外国語(英語)コアカリキュラム」記載「学習項目4」と「到達目標3および, 4」を参照した。 http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report_28_all.pdf (最終アクセス日: 2020年10月18日)
- (27) 前掲(22), p. 88.

謝辞

本調査に快く協力し、一連の発音練習に積極的に参加してくれた2019年度新教1年生後期「英語II」科目の受講生の皆様に、こころから感謝致します。